

校歌作曲で全国に知れた
楠美恩三郎

くすみ おんざぶろう

楠美恩三郎は一八六八年（明治元）三月二十五日、父晩翠、母さたの三男として、弘前市蔵主町に生まれた。

生まれつき音感にすぐれ、また幼時より音楽を好んだので、近所の人々は、

「なるほど。血は争えないものだ。」

と感心したという。

それというのも、恩三郎の生まれた楠美家は、代々平家琵琶（平曲、または平家ともいう）を受けつぎ、いずれも名手として、奥義をきわめた家だったからである。

恩三郎の祖父の太素は、幕末の津軽参政として功績のあった人だが、書をよくし、印章彫刻に巧みで、藩主の雅印を彫るほどの腕前であった。さらに家伝の平家琵琶では「その音色の清艶、その肝声の壮烈、その曲節の整正なる、緩急自ら備わり、詞曲は麻岡宗匠と少しも異ならざりし」と称された名手であった。麻岡宗匠とは、太素が江戸において師事した琵琶の名人である。その名人と差がないほどの腕前と、太素はいわれたのである。

太素には、晩翠、楽翁らくおう、漸之進ぜんのしんの三人の子があつた。三人とも父から平家琵琶を学び、いずれも奥義に達したが、なかでも三男漸之進は、後半生を平家琵琶の譜本の整理保存、研究にささげた人で、後年、恩三郎と音楽の上で深いかわりを持つことになる。

恩三郎の父晩翠は、若くして江戸に遊学し、西洋兵学を修めて弘前に帰った。

戊辰戦争のとき、津軽藩は奥羽同盟を脱退して勤王に方針を変えたため、同盟諸藩から激しく非難された。ことに隣国の南部藩は使節を派遣して津軽藩の責任を問うた。このとき使節を応待したのが晩翠である。晩翠は同盟諸藩の非難は覚悟の上と堂々と渡り合い、勇名をとどろかした。

そのような晩翠だったが、幼時から平家琵琶を父太素に学び、詩文を兼松石居に学んで深く達した。いわば文武両道の達人だったのである。のちに恩三郎が音楽の道を志したとき、父をはじめ、一族みんなが賛成し、激励してくれたのも、楠美家が平家琵琶を通して、音楽の持つ力を知っていたからに他ならない。

また、こんなエピソードがある。

一八七四年（明治七）三月、弘前の東奥義塾に、英語教師としてジョン・イングが赴任した。

イングは、アメリカ美以監督教会みいの宣教師であつたが、東奥義塾塾長の本多庸一が横浜でイングに会い、その人物にほれこんで義塾に招

いたのである。イングは学問芸術にすぐれ、ことに農業の知識が豊かであった。

弘前に着いたイングは、その家族に日本語を習得させようと、楠美太素に教師を依頼した。そんなことから、イング一家と楠美家の家族ぐるみのつき合いが始まるようになった。

ある日、恩三郎と兄の冬次郎は、父晩翠に連れられて、イング邸を訪問した。そして、りんごその他の西洋果樹の苗木をもらって帰った。その苗木を庭に植えたことから、兄の冬次郎はりんごの栽培に興味を持ち、一生をりんご栽培にささげるようになる。冬次郎は自分が育てたりんご品種『国光』を中国東北部に普及させ、ついにその地で死去するのである。

一方、弟の恩三郎も、イング邸でその一生を決定するできごと^{きごと}に遭遇する。恩三郎はイング邸で、この世のものとも思われない妙なる音^{たえ}を聴いたのである。それは、生まれて初めて聴く音色であった。そのときの恩三郎には、なんの音かわからなかったが、それはイング夫人が弹奏するオルガンの音色だったのである。

のちに東京音楽学校教授となり、作曲とオルガン弹奏を指導した恩三郎は、「^{オルガン}風琴の神様」といわれるほどの名手となるが、恩三郎は、「わたしはイング邸で聴いた妙音に近づこうと弾いているだけだ。」

といつも語ったという。

恩三郎が「風琴オルガンの神様」といわれるようになったのも、じつに、七歳のとき聴いた妙なる音が、その遠因をなしていたのである。

兄の冬次郎といい、弟の恩三郎といい、少年の日の出会いほど、不思議なものはない。

恩三郎は、東奥義塾小学科から中学科に進み、一八八二年（明治十五）青森県師範学校に入学する。当時、師範学校は青森に本校があり、弘前に分校があった。恩三郎が入学したのは分校の初等師範学科で、同級に高山きよたか亀代作（永く県立弘前中学校教諭、号を松堂といい書家として有名）や石戸谷軍三郎（のちに弘前市第一大成小学校校長）などがいた。一八八四年（明治十七）二月同校を卒業、翌年六月中津軽郡富田小学校訓導として同校に赴任する。

富田小学校の先生となった恩三郎は、子ども達に唱歌を教えた。唱歌というのは、今日の音楽のことである。弘前市教育史によれば、弘前の小学校で唱歌を初めて授業に取り入れたのは、一八八七年（明治二十）五月となっている。だが、恩三郎はそれより二年も前に唱歌の授業を行っていたのである。

唱歌は子ども達に喜ばれた。楽しそうに唱歌を歌う子ども達を見て、恩三郎はもつともつと音楽を研究しようと奮ふるい立った。

ちようどそのころ、青森県師範学校に、傍島そばじままねという音楽の先生が赴任した。恩三郎は傍島先生を訪ねて、楽譜の読み方を習い、また

オルガン奏法の手ほどきを受けた。

その当時の弘前の音楽の普及について、恩三郎の同級生高山亀代作は、こう語っている。

「当時、師範学校に傍島まねという音楽の先生がいて、わたしも弘前代表で音楽の講習に出席した。そこで三大節（四方^{しほう}^{はい}^{はひ}）一月一日、紀元節二月十一日、天長節十一月三日）の式歌を習ってきたが、それを覚えただけで立派に音楽の先生として通用し、あちこちへ講師として出歩いたものである。」

右のようなありさまだったから、楽譜が読め、オルガンを弾くことができる恩三郎が、当時いかに音楽に抜きんでいたか、想像がつくであろう。

ますます音楽に打ち込んだ恩三郎は、

「わが高祖父（恩三郎の四代前の楠美^{しやうじ}莊司の^{しやうじ}こと）は初めて雅楽と平家（平家琵琶）を江戸において学び、それを津軽藩^{そうでん}に相伝し、それ以来わが楠美家は、音楽の家として今日に至った。よし、自分は音楽をもって身を立てて、祖先の恩義にむくいることにしよう。」

と決心した。

しかし、恩三郎が目ざす音楽は、先祖から相伝の平曲ではない。新しく日本にはいつてきた西洋の音楽である。それが理解されるかどうか

か心配だったが、思いきって父に打ち明けることにした。

恩三郎の決心を聞いた父晩翠は、

「音楽の道は一つだ。西洋の音楽をやるのもよかろう。平家の楠美の名を汚さないよう、しっかりと勉強しなさい。」

と心よく許してくれた。

父ばかりでない。叔父の漸之進も、

「文明開化の世の中だ。平家の楠美から西洋音楽の者が出て、これは時勢というものさ。」

と激励してくれた。

こうして、恩三郎は文部省音楽取調掛とりしらべがかりに入学することになる。一八八七年（明治二十）二月のことで、恩三郎はようやく二十歳を迎える時である。

文部省音楽取調掛というのは、音楽教師の養成と、唱歌教材集の編集を目的に、一八七九年（明治十二）十月に設置されたもので、伊沢修二がその御用掛ごようがかりとなった。伊沢はアメリカ留学中師事したボストンの有名な音楽教育家、ルサー・メーソンを御雇教師おやといに招聘しょうへいして、日本の音楽教育や唱歌集の編集、伝習生でんしゅうせいの教育などに当たらせた。音楽取調掛では、明治十四年から十七年にかけて、最初の『小学唱歌集』

三編を刊行したが、その中には今も歌われている「蛍の光」や、「あおげば尊し」「庭の千草」などが収められている。

文部省音楽取調掛が、東京音楽学校と改められたのは一八八九年（明治二十二）のことで、この年、恩三郎は卒業した。だから音楽取調掛に入学した恩三郎だが、卒業は東京音楽学校師範科となっている。

音楽学校卒業と同時に、恩三郎は香川県尋常師範学校助教諭に任ぜられ、香川県高松市に赴任する。高松市の近くには屋島など平家物語にゆかりの地が多い。幼時から平曲に親しんだ恩三郎には、それら源平合戦の古戦場が、特別の感慨をもって眺められたことであろう。それが楽想となって泉のように湧き出したことであろう。このころから恩三郎は、作曲に没頭するようになる。また、時には、故郷弘前を想い出すのか、母校東奥義塾の学友通信（明治二十三年二月、二十五号）に消息を寄せている。

香川県に在ること三年余、一八九三年（明治二十六）二月、恩三郎は京都府尋常師範学校へ転任する。京都は恩三郎の性格に合った土地だった。静かなたたずまい、山紫水明の都は、恩三郎の楽想をいよいよ豊かにし、またオルガン奏法にみがきをかけた。

しかも京都には平曲の名手、藤村検校けんぎょうがいた。恩三郎はたびたび検校の琵琶を聴き、平曲への思いを新たにあらにした。その間、恩三郎の叔父漸之進は二度にわたって京都に出向でむき、恩三郎の紹介で藤村検校の平曲を聴いたのである。このころ漸之進は、一家を挙げて上京し、平家琵琶の研究に後半生をささげる決心をもっていた。それだけに西洋音楽を教える身でありながら、平曲に対する情熱を失わない甥おい恩三郎を

漸之進はほめたたえ、また激励したのであった。恩三郎も京都が気に入って、終生この地で終わろうとまで決心していたのである。

ところが一九〇二年（明治三十五）四月十五日、文部省から東京音楽学校助教授に任命する通知があった。

そのころ、日本における音楽教育も隆盛の一途をたどり、さまざまな唱歌集が出版されていた。その中には教育上好ましくない唱歌もあって、文部省はその対策として、文部省による新しい唱歌集の刊行を目ざしていた。その新しい唱歌集というのは、国定教科書「尋常小学読本」の中にある韻文教材（今日の詩教材）を作曲し、編集することであった。

その作曲者の一人として、楠美恩三郎に白羽の矢が立てられたのである。作曲の能力だけではない。オルガン奏者としての腕も認められたのである。

一生を京都で送ろうと決心していた恩三郎ではあったが、この知遇に感動した。恩三郎は勇んで東京音楽学校に赴任し、東京本郷弥生町に移り住んだ。

上京した明治三十五年から、恩三郎の活躍が始まる。翌年三十六年八月、恩三郎は『中等教科唱歌集（伴奏付）』を吉川弘文館から発行する。当時小学校唱歌教材が整備されつつあるのに反し、中等学校唱歌教材が雑然としていた。それを正しくしようとの意図から出されたのがこの唱歌集で、これによって楠美恩三郎の名は、一挙に高くなった。

ついで三十七年、恩三郎は内田糸太郎くめ たらう、岡野貞一と共編で『国定小学読本唱歌集（尋常科）』（上中下）と、同じく（高等科一―四）を發行する。

一方、作曲家としての恩三郎の名もようやく高くなる。作曲では幼いときから学んだ平曲が物をいった。恩三郎の作る曲は、時には大河のように洋々と、時には急流のように激しく、しかも壮重の気が満ちているため、人々に好まれた。しかもその曲は俗に流れず、気品に満ちているため、校歌の作曲を依頼する学校が殺到さつとうした。

恩三郎が作曲した校歌の中でも、特に有名なのは一九〇五年（明治三十八）作曲の「仙台第二高等学校校歌」である。普通「二高校歌」と呼ばれ、二高生徒ばかりでなく、日本中の青年たちに歌われ親しまれた。作詞は有名な詩人、土井晩翠どいである。

土井晩翠は一八七二年（明治五）仙台市北鍛冶町の質屋の長男に生まれた。名は林吉。仙台二高を経て東京帝大英文科を卒業、中学校の先生から母校仙台二高の教授となった。詩人として一世を風靡ふうびし、「荒城の月」の作詞者として有名。一九五〇年（昭和二十五）文化勲章を受賞した。

恩三郎は晩翠が自分の父と同名のため親しみを覚えたのか、その後、晩翠の作詞にしばしば作曲する。おそらく、晩翠の詩が持つ悲愴感ひそうかん、あるいはそのリズムが恩三郎の琴線きんせんにふれ、名曲が生まれたものであろう。

他に土井晚翠作詞、楠美恩三郎作曲の校歌に「青森県師範学校校歌」がある。一九〇九年（明治四十二）一月七日の制定である。作詞を高名な土井晚翠に依頼できたのは、恩三郎の仲介によるものである。恩三郎にとって青森県師範学校は母校である。作曲に当たって、母校のために、という思いも強かったにちがいない。そして、できた校歌は、まさに玲瓏たる名曲であった。

同年二月十三日夜、青森県師範学校では校歌披露の音楽会を開催した。当日、講堂に数百名の聴衆が招待された。音楽会の最後に、全校四百名の生徒が校歌を合唱すると、満場の聴衆は感動のあまり、総立ちとなって拍手喝采をしたという。指揮をとったのは同校音楽教諭の釜范善作で、東京音楽学校における恩三郎の教え子でしかも弘前出身である。ちなみに、弘前市立朝陽小学校校歌もまた恩三郎の作曲である。

一九一〇年（明治四十三）、文部省編集の『尋常小学読本唱歌』が刊行された。この唱歌の作曲のために、恩三郎は心血を注いだ。

『尋常小学読本唱歌』は、小学校国語読本の韻文教材に作曲した唱歌集で、文部省が本格的な唱歌集を編集する第一段階として出されたもので、編集委員は、楠美恩三郎、上真行、島崎赤太郎、岡野貞一、南能衛で、これらの人たちが手分けして作曲した。

その唱歌集の中には、「春が来た」「われは海の子」「鎌倉」など、今に残る曲が含まれているが、作曲者名が伏せられているので、恩三郎がどの唱歌を作曲したのか、残念ながらわかっていない。

同じく明治四十三年、文部省は『尋常小学読本唱歌』に続いて、『尋常小学唱歌』（全六冊）を刊行した。

そのころ、全国の小学校では、言文一致唱歌がはやっていた。言文一致唱歌は、わかりやすく魅力があり、全国的に歌われていたが、東京音楽学校を中心とする音楽家は、「唱歌の気品を害するもの」としてこれに反対していた。その結果、「気品の高い唱歌」を作ろうという気運がもりあがり、文部省による『尋常小学唱歌』が刊行されたのである。

『尋常小学唱歌』は、各学年用が一つ一つ別冊になっていて、これまでのように外国の曲を借りることなく、全部日本人による新しい作曲であった。編集委員は作詞と作曲に分かれていて、次のような顔ぶれである。

作詞委員（委員長）芳賀矢一、（委員）上田万年、尾上八郎、高野辰之、武島羽衣、八波則吉、佐々木信綱、吉田一昌

作曲委員（委員長）湯原元一、（委員）楠美恩三郎、上 真行、小山作之助、島崎赤太郎、田村虎蔵、岡野貞一、南 能衛

右を見ると、当時の有名な文学者と作曲家に委嘱して、編集したことがわかるであろう。

この唱歌の中には、現在歌われている唱歌が、たくさん含まれている。一年生の唱歌をみただけでも、「鳩」「かたつむり」「牛若丸」「桃太郎」「花咲爺」などがある。唱歌が持つ命の長さが思われるが、それだけ作詞作曲がすぐれていたからであろう。

尋常小学唱歌は、一年生から六年生まで、全部で二百曲あるが、そのうちの何曲かは恩三郎の作曲である。しかし、文部省作詞作曲として、作詞者も作曲者もその名を伏せてあるので、今ではどの曲が恩三郎の作曲なのかわからない。だが、日本の音楽教育の黎明期に、力を

尽くした恩三郎の功績は不滅である。

東京音楽学校に、邦楽調査課ほうがくが置かれたのは一九〇七年（明治四十）十月のことである。これまでの西洋音楽一辺倒いっぺんどうが見直され、わが国古来の音楽を大切にしようという気運が生まれたのである。当然、平曲の調査保存も問題となり、平曲の秘伝を受け、しかも名手として知られた恩三郎の叔父館山漸之進が、調査課の嘱託員となったのである。

ここにおいて、漸之進、恩三郎の叔父甥は、手をたずさえて仕事を進めることになる。ことに漸之進は、平曲の調査保存に寝食を忘れて没頭した。

恩三郎も叔父の仕事をよく助けた。かれは叔父の依頼を受けて、京都に出張し、平曲の名人といわれた八坂やさか、明石あかし、杉山の三検校の木像を撮影し、その位牌を調査し、あるいは仏教音楽の声明しょうみょうを聴いて、平曲とのつながりを研究して、漸之進に報告した。

平曲の調査保存のため、東京音楽学校ではそれまで採譜に努力していた。しかし、平曲の微妙な節回しふしまわは、西洋音譜で採譜するのが困難であった。採譜しても、採譜者に平曲の素養がないため、さっぱり要領を得なかった。

そこで漸之進は、平曲に素養のある恩三郎が適任と考え、校長に、平曲採譜者として恩三郎を推挙した。校長も賛成したので、恩三郎は

叔父とともに平曲の保存に取りかかった。

楠美家ゆかりの平曲の秘伝を、叔父甥が協力して採譜することに、二人とも深い感慨をいだいたことであろう。

恩三郎は苦心の末、平曲の節回しを西洋音譜に写すことに成功する。こうして、漸之進恩三郎の協力によって、初めて平曲の真髓しんずいを後世に残すことができたのである。

館山漸之進は、五年の歳月をかけて、名著『平家音楽史』『平家物語史論』を完成する。その本で漸之進は、甥おい恩三郎を次のように述べている。

「楠美恩三郎は、音楽の家に生まるるにより、音楽をもって世に立ち、祖先に報ぜんとの望みを起こし、遂に東京音楽学校の教授となる。今や平家音楽調査保存の勤めに当たり、高譜こうふ高韻こういんの緩急かんきゆう長短、抑揚よくよう強弱の演体えんたいに対し、他の洋楽諸氏の描写し得ざる楽曲しやうきょくを周到しゅうじゆうに描写し、漸之進の勤務をして遺憾いげんなからしむ。大にしては政府の事業たる、平家音楽の保全まっくを全うする者にして、小にしては父祖の希望たる、平家音楽の保全を全うする者、幼年志望むな空しからざるなり。」

叔父が甥を、これだけほめるのも稀まれであろう。しかし、この言葉には真実がこもっている。恩三郎は音楽学校教授として、生徒を指導し、作曲をなし、唱歌教育を確立し、平家音楽の採譜さいふをして、古曲音楽を今日に伝えた。音楽の家に生まれ、音楽をもって立ち、音楽に生涯を

終えた、見事な一生といえよう。

楠美恩三郎は晩年京都に住み、一九二七年（昭和二）死去した。墓は京都吉田神社にある。

参考文献

堀内敬三・井上武士編『日本唱歌集』一九六〇年（昭和三十五）岩波書店

船水 清『楠美冬次郎』ここに人ありき(2) 一九七〇年（昭和四十五）陸奥新報社

出典…弘前人物志編集委員会編『中学生のための弘前人物志平成十五年度版』二〇〇三年（平成十五年）弘前市教育委員会、一六四～一七七頁

1909年(明治42)1月7日制定

青森縣師範學校校歌

七井 晚翠 作歌

楠美 恩三郎 作曲

サ ー ン カ ヒ イ ツ ル シ チ ー シ ャ ノ
 キ タ ノ ハ シ ナ ー ル ム ー ツ ノ ク ー ニ
 マ ヘ ニ ハ ル ー カ ー ニ ツ ガ ル オ ー キ
 シ ラ ナ ミ ヤ マ ー ト ク ゲ ー ク ル ヲ
 ナ ガ ム ル ト コ ー ロ コ コ ー ニ シ チ
 シ キ ー シ シ ハ ン ノ ラ ー シ ヘ ノ ー ヤ

- (一) 山河秀づる七州の 北の端なる陸奥の国
前に遙かに津軽沖 銀浪山と砕くるを
眺るところここに 布しき師範の教の舎
- (二) 朝日の本の国の民 花と咲きいで実を結ぶ
其の根を深く培はむ 道はここにと螢雪の
時を扱ばぬいそしみに 健児三百集りて
- (三) 夕ぐれ共に逍遙の 歌声返す堤川
涓滴いつか集りて 溶々遂に海に入り
息まぬを見ずや学芸の 門に立つ身の鑑とも
- (四) 這状す土の低きより 立ての無言の警醒か
西の彼方に漂渺と 虚空に泛ぶ津軽富士
南雲間に峻嶺の 八甲田山並び立つ
- (五) さらに人生崢嶸の 道に進まむ身の鍛
俗を敦くし愛を増し 礼を重んじ法に抛り
心の操自らに 治めよ聖も与すべく